

所謂遠心性環狀紅斑に就て

西山 敬三

佐藤 徹

一種の慢性遠心性紅斑の四例（二五歳及び二九歳の女子、二名の三八歳女子）にして、孰れも Darier 氏の Erythème annulaire centrifuge (Erythème papuloirrité migrateur et chronique) に類似するも、第一例は Lipschitz 氏の Erythema chronicum migrans に酷似し、「ペプトン」に過敏にして Pepton-Deessensibilisierung より初めて治癒せしむる事を得たり。

癩病患者の食鹽代謝に就て

季 鶴 松

癩病患者血液食鹽量は四八〇—四九七 mg/dl. 二四時間尿中食鹽排泄量は六・八六四—二四・三七七g なり。故に癩病患者の食鹽代謝には著明なる異常を認め難し。

驅癩療法の遠隔成績に就て

佐藤 邦 雄

大谷 義 夫

山崎 勲

比較的充分なる治療「サルザルサン」五回以上注射を加へたる癩毒患者にして、治療後三年以上を経過したる者八六例に就て癩毒血清反應、腦脊髄液検査、大動脈、聽器、視器の癩毒療法の遠隔成績を調査せり。而して血清反應より觀たる治療成績は第一期第二期の

早期に治療を開始せる者の陽性率二二・二%なるに比し、第三期に開始せる者は五〇%陽性なり。潜伏癩毒に於ても早期に開始せるは一・八%なるに反し、晚期潜伏の状態に於て初めて治療を受けたるは八三・三%の陽性率を示せり。

結核を伴へる孤立性腎臟囊腫について

大森 清 一

三三歳男子の左腎に於て孤立性腎臟囊腫と腎臟結核の合併せる症例にして、之を組織學的に検査し兩者は各獨立的に存在せしものと。

皮膚泌尿器科雜誌第三九卷四號

昭和十一年四月

皮膚に於ける化膿菌の研究(第II報)

各種化膿性皮膚疾患に於ける葡萄狀球菌の差異

村本 剛 太郎

出所を異にせる化膿菌相互間の單一なる生物學的性状を検し其の陽性率或は強度を以て各菌の由來せる疾患を窺知するは困難なり。尙個々の菌株が有する生物學諸性状及動物に對する毒力を以て、該菌の屬する疾患部の特徴とする事能はず。

「ストーム」反應補遺

千原 隆 三

種々なる皮膚疾患六二四例に「ストーム」反應を實驗し、濕疹に於